



四種の流の圖 上五頁に

阿行 上十三頁

左行 上二十九頁

奈行 下五頁

麻行 下二十四頁

羅行 下三十六頁

加行 上十四頁

多行 下一頁

波行 下七頁

也行 下三十三頁

和行 下五十一頁

ホ 2
4383
1-2



あつりてはるまゝの詞はさうきこ又てふ
を波奈とこれを一厘の書とて是はらふふ
まゝかゝ歌よむを文書よむはたのまゝ
事たのまゝはひ死なむたる是持の妻ふ
常つし詞をさひまゝにけあまはらふらお
のつから聞おほえんはまはらふらまゝな
れは何事のうたふまゝにまゝにたふたふ

〇八種語釋の序



ふしをさしなむを中昔は頃より
外國の學ひの道は後ありておのり生れ出
たる皇國のそまきゆきし惟神なる道の
実無き志る人まなくあやまらむ
くはくたなをさるる葉のそまあやま
本末としてひる免皇典ふまきたの魚
けりぬるものおやうりなをさしらのおほら春

庭翁そをいさく歎きて詞の八衢を
免て書あらしし流ひしに魚の言
葉の道よまの魚り古その深き意を解あ
たら免歌よみ布美かふも大いなる
ふしをさしなむを中昔は頃より
林よあきりまき風流士のみを天の下に
の為らふあきしはまをさしなむ

々ふ志のちあはれはもあやれ妙なる千万
此言葉演の生妙の教志のあはれは底源
ま心の限りなき程にかまか思ふもあはれ
この方志のあはれは志のあはれは
頭書といふものもあはれは志のあはれは
このことよ今の世に俚言といふあはれは
福むらるよ書といふ世に世にたると初学の為

いふよき事よふてよはるはのよはれは
う照月のあはれはふ成とて申く事よ
大御代の光りもあはれは学は道のあはれ
をひあはれはあはれはあはれはあはれは
ふ白とあはれはあはれはあはれはあはれは
孫とてそのあはれは申くよはれはあはれは
よ一もあはれはあはれはあはれはあはれは
浪速のあはれはあはれはあはれはあはれは

岡島某の志すくよ志り春のちれを
ひきこくぞおれどしきしきよよ書き
くおれよよ取舞し時を明治十と染阿ま
理せせしつよの春はまをの伊賀
國松坂の里よ代よを免ふ本居信郷

名和春書

語釋の序

本居の大人乃著いそ社此洞の八ちまこの歌文お
と物せむよえさしと保うの道行よも以中ようあ
は書乃めくよ義きなれを物學比のそを履け
行よそひしやませく事よおて尊よもしをや
まぬ人もなくたのれもや志と治治く信みよ
とけつ聊を編へらるあもらまをを程さる
こそあふよしあそ思よまもつ洞の意を知るそ

わけらむ乃のあつきたらむと活語との證と
さるもつ書こもよもむて何もそ俗サレバあると世
のつね乃漢語と其意をうつつとゆらと書つけ
おきをおもくのことあるやとあ志る人志たると
女を出さし持しのことはいよをあたふ業とと思ふ物の
ら初学の助けともなるとありと語釋といふ名おほ
きてこく物志つとよとを

明治十七年四月

渡邊弘人

凡例

一凡て釈トキ先達の説をむねとせよとてつねに其書目
をあけむものことらとさよ皆畧せとて世の常
なる所ぬ釋よの事某云何書と云ふ事と云ふ事
一をゆる辞をつねにゆめをてふをはの係結カケムスと云お
のつとん乃定まあまて此書のとをら詞の活用を
あてその論ひよ及りし御とさる文とも用ある
處のこをとりあつとつとむとをのあつとつと

下
み
ふ
の
を

へきかひみおのまほ乃活やく四段の活乃才一乃音と二のまきこの
二つ活をひやく用えへ傍くことほありうらうらにまきをそのあつら
をひやくらうらこそ國のひやくまき音ふるもどをそくたるハ四段
のまきこれ才三の音やむおどく切ら調と辨えへ傍くことまき
てうらうらにまき二つを用うらや四段活はむおどくまきまき
をそくたるハ四段の活は才四の音とむおどくあそのむまきむ
うらうらまきまきおどく但しるもどをそく切らことまきまき
くあまきまきをひやくハ後の活はむおどくハ萬葉集十ハ春
野乃うらまきまきまき 熟 熟思古 今集亦存やむらむらむらむら
むらむらのまきまきに似るまき後撰集も亦く見信人ありまき

讀
の
意

才依日記おほむらむらむら才二の音まきかひみおより切ら調とらうら
てまきまきを用いたりこのまきまき
○中二段の活は **あ** **は** **な** の三行むらむら才二のまきまきまきまき
むらむら四段の活は才一の音と二の音と活をひやく用言へ傍
くことまきまき受てまきまき二つとらむらむらむらむら
才三の音くつむらむらハ四段の活はまきまき才三の音のまきまき
むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
才三の音は休言へ傍く言葉のかたてうらうらむらむらむらむら
を用いてかなまきまきをよりあまきまきまきまきまきまきまき
四段

平代のふ
代と祝ひ
藏

みふ用云へばけならなり

○世ふつ下知の河ハ四候の活ゆくハ第四此音けてへめを

そのまにてはけ。わ。せ。わ。く。人。あ。ぞ。つ。ひ。そ。も。船。も。ち。下。知。の。河。を。あ。致

を。一。候。の。活。ゆ。く。ハ。才。二。の。音。へ。き。に。ひ。み。お。お。よ。も。と。を。く。入。て。拾。遺。集。お

やく。ま。み。ぞ。老。の。夜。子。よ。君。古。今。集。上。山。の。さ。く。く。を。雨。も。積。や。ち。わ

見。よ。情。冷。日。記。お。ら。ち。ひ。お。ハ。お。お。よ。を。し。を。む。も。び。し。の。お。ぞ。つ。ひ。仲。二

候。の。も。も。き。も。才。二。此。音。ま。ち。ひ。み。ひ。お。お。よ。も。と。を。く。入。て。古。今。集

よ。あ。れ。ひ。と。も。せ。は。よ。は。よ。こ。つ。の。後。一。あ。は。れ。河。雲。乃。か。ひ。吹。ひ。吹。ひ。ら

ひ。免。松。拾。遺。集。上。ひ。ら。れ。き。も。の。せ。ら。や。を。や。を。つ。ひ。下

二候の活ハ才四の音えけ。せて。祓。へ。め。え。ま。お。よ。も。と。を。く。入。て。古

今集上人よを。け。が。よ。あ。は。れ。け。ら。子。拾。遺。集。お。あ。ら。ぬ。わ。を。あ。は。れ。ひ

わ。を。よ。ま。と。ゆ。り。け。り。わ。き。ひ。よ。子。代。乃。を。み。く。古。今。集。に。わ。後。う。い

と。を。よ。ゆ。き。て。う。の。受。て。万。葉。集。上。き。か。つ。ふ。や。う。る。免。余。古。今。集。に

と。い。ま。る。て。れ。よ。枝。い。と。れ。を。を。な。ど。あ。り。て。こ。の。三。種。乃。活。ハ。か。く。よ。も。じ

ら。き。河。ハ。よ。又。字。と。そ。人。屯。古。事。記。下。卷。哥。小。加。理。許。母。能。美。陀。礼。婆

美。陀。礼。續。紀。宣。命。小。加。理。許。母。能。美。陀。礼。婆。止。等。の。ま。た。よ。萬

葉。集。二。よ。ゆ。め。ろ。ぬ。國。乎。治。跡。因。み。た。く。不。率。ゆ。く。く。あ。ら。ぬ。思

浪。之。米。同。十。七。阿。比。見。之。米。等。曾。同。十。八。く。あ。ら。ぬ。思。之

○八衢語釋上

○十

加理許母能美陀礼婆
云能美陀礼婆
將乱物
乱詞上
ゆめろぬ
阿比見之米
浪之米

海士 鈎 船 東風吹イタメ梅香ヲ
並 藏 響 詔 亂 者
ハヒマツウイナスナヨ
シカシガ
カ
リ
ゴ
セ
メ
能
美
陀
礼
婆
止
等
の
ま
た
よ
萬
葉
集
二
よ
ゆ
め
ろ
ぬ
國
乎
治
跡
因
み
た
く
不
率
ゆ
く
く
あ
ら
ぬ
思
浪
之
米
同
十
七
阿
比
見
之
米
等
曾
同
十
八
く
あ
ら
ぬ
思
之

弘人云受
授の図上
下の字
の活の字
をかへ変
格の活と
其位置を
轉さべし

	四段の活	一段の活	中二段活	変格の活
	吹 ^フ 飽 ^ム	着 ^{キル}	過 ^{スル} 起 ^{スル}	來 ^ル
	㊦	㊦	㊦	㊦
でぞ	きむぬ でぞ	きむぬ でぞ	きむぬ でぞ	きむぬ でぞ
	㊦	㊦	㊦	㊦
りて	けむ けりて	けむ けりて	けむ けりて	けむ けりて
きて	ぬみ ぬきて	ぬみ ぬきて	ぬみ ぬきて	ぬみ ぬきて
	㊦	㊦	㊦	㊦
えう	けり けりえう	けり けりえう	けり けりえう	けり けりえう
	㊦	㊦	㊦	㊦
まか	か かも	か かも	か かも	か かも
	㊦	㊦	㊦	㊦
た	ど ども	ど ども	ど ども	ど ども

加行之圖 並受つてふをよのよ

四段の活詞

○ 変格の活へくるを河のそふてこのかや活へぬうらふ
 とそあやふれぬ〜 但し 去るのてふをさうらふはき〜
 き〜うなどきよむは〜 格あるはをへつてされあて〜
 こ〜かあぞこよりのちたるちりてき〜の活ふやぬの着ふ
 え〜う〜く〜や〜れ〜あ〜く外上例あり下知の〜を〜あ〜こ
 この〜の〜例あり

あ〜飽
 あ〜開
 あ〜か〜跳
 あ〜び〜欺

あざやぐ鮮麗	あふぐ仰	あぐ喘息	あゆぐ動
あぶる歩行	あぐ <small>又往</small> 生	あぐ	あぐ急
あそく	いたく抱	いたぐ戴	あぐ齋
あなぐ嘶	あらく奇	うぐ浮	うぐ動
うまぐ領知	うぐ急走	うぐ薄	うぐ動
うたぐ	うぐ頸懸	うぐ <small>點頭又首肯</small>	うぐ叫
おく置	おぞろぐ驚	おがめく恍惚	おもむぐ趣
およぐ游泳	おく書	おぐ搔	かぐ嗅
おやく耀	おぐ炊	おぐ傳	かたぐ傾
おづく <small>又被又潜</small>	おづく鬢	おひろぐ妙	かぐ乾

まぐ聞	まさまきぐ輓	まどぐ築	まきぬまぐ爛
く漏	くぐ碎	く <small>又甘</small> 窺	くぐ口説
けさやぐ氣亮	こぐ扱	こぐ榜	こぐ嘶咽
けく咲	けく裂	けく私語	けく耳語
けぐ <small>葦</small>	けやぐ騷	けやぐ爽	まぐ敷
まぐ及	まぐ退	まぐ蹈折	まぐ沈透
まのぐ凌	まぶぐ <small>歎嗽</small>	まぶぐ風吹	まぶぐ退
まぐ透	まぐ徹	まぐ嗜	まぐ耕
まぐ濯	まぶぐ集	まみやく速	まぐ塞
まぐ退	まぶ <small>又刻又省</small>	まぐ <small>又灑又激</small>	まぐ <small>履声</small>

○八閩語釋上

○十六

ちん断を換

むごく身抱

むごく断

むごく拵

やく焼

やもく和

ゆく行

ゆるぐ揺

ゆるぐ緩

よく除

わく沸

よく分

わかやぐ若

わろく戦慄

ゑなぐ喙

ろくぐ又醉笑
又嗜樂

をく招

を免く叫喚

を免く戦慄

府の形容
辭の約
來の約
これ何
ても其
ふ物の
を物

○右ふ奉たる河乃既○乃下とつきるを河の底乃證と
下ふいりるちりなり下み多や

○右にゆたる葉の外何めくとりとを我まのく
いふのくしり

○あがく新撰字鏡小疏阿加久とりり

あが馬
のあがく
より出て
人の手足
あがくも
よ足撫の
義

○あがやく源氏物語寄生小りぎやちて云と云てれあり

○あぐ万葉集三小阿倍すつらぐれゆけバ和名抄イ
喘息安倍岐枕草紙小老たるものくくたうくあぐりり
く云くまあぐまぐひなぐつら

○あゆぐ拾遺集物名小星れりゆぐとりてつら千載集本
行キ動ク

○あゆぐ若葉小やあや

○あゆぐ六帖四つける日のこくは不物治条使ふくまわ

これぬち拾遺集別ふくくも葉同意よりやとゆも後拾

遺集意ふくむとどね源氏物語桐壺ふくゆやきハのち

かりけで手習巻ふけてあやつくやうてあぐきや伊勢集よ

○ハ衛語釋上

○ハ衛語釋上

○十八

あが馬
のあがく
より出て
人の手足
あがくも
よ足撫の
義

のち多
のち多
のち多
のち多
のち多
のち多
のち多
のち多
のち多
のち多

摩久良可
武可武ハ
詞みてセ
人といふ
同ド

水に臨み
汚穢を濯
ぎ改む
心改む
る業をい

由良心
良人の
延言
玉を
王を
狂を

日記に於ては...
佛道ノ行スル

○ひろく 花葉集よひらめきてあり

○ふたへく 日本紀小惠恨哭惠念なせよ見え

○ふたへく 蜻蛉日記よみ雨ゆつ...
エラウ フキブル

○ほごく 日本紀神代巻小神祝祝之や...
フキブル

○まろく 古事記中巻小枕其後之御膝萬葉集九小

人のひざのへりダ摩久良可武あ...
マクニシテ

○まろく 字鏡小瞳目數動白万志呂久とあり

○みそく 万葉三十...
ミソギテマシラ

みだく 万葉十八...
海 水 浸 屍

酒 弥豆伎...
酒 水 浸

○ゆらぐ 万葉二十小由良久...
ユラトタマシ

○ゆらぐ 住吉物語...
ユル

きたれを云く...
ユル

○よく 後撰集秋小宿...
ヨクテク

ふき秋乃良の月又よ...
ウ

元真集にも...
ウ

道ハよ...
ウ

中二段の活詞

このころを俗にハミウと云例あり

いくる生

起くる

止ぐる過

尽くる

なぐる和

よくる除

○いくる情冷日紀一おきむむやねんといくく人ぞいりき
やとあゝのそめてこの活あるハ見あつてびさそこの河らわら
四段より活きてねんハ云あそそそそにハ

○なぐる万葉四ふあうりもていハ奈木六切くも十七ふあが

きこひり奈具流もひく又十九ふくろ奈疑年やむが

あうそむて身二乃音よりむ乃てにそ反びくくねん中二段

の活よばの例こそい河を四段よそそそそそハサヤハ

○よくる万葉九ふくろはあとの典久列とわれをまうそ十五と

たら月とに典久流りもあうそ今集春ふみのもそら

うはよやのそはね忠集ハ多葉をよはうはがのそら

美宴よハ中そそらばき人ハはれそそわをね枝ハゆ

らきハそわわく新がそそのかむを才二乃音よりうらねハ

れそたうきの格あま源氏竹川ハむよき波まねを流ふ又

ふたぬむがのそそふハ今撰和歌集ハうみてそそいそき

つそやまはるそそはるそそそそそそそそそそそそ

い河も四段よそそそそそそそそそそそそそそそ

下二段の活詞

此を俗言よハけるこゝに例なり

あぐる開 又明 幼	あぐる揚	あぐる預	あぐる散
いぐる懸	うぐる受	うぐる醉	おもむく面内
かぐる懸	あぐる掲	あぐる萎	あぐる被
あぐる感	うぐる碎	あぐる避	あぐる提
あぐる棒	あぐる授	あぐる妨	あぐる退
あぐる白	あぐる精	あぐる着	あぐる媒
あぐる背	あぐる長 又欄	あぐる助	あぐる奸
あぐる平	あぐる手内	あぐる附着	あぐる告
あぐる続	あぐる解	あぐる遂	あぐる投

紀二散馬駭
をいけり
の時少
はきり
れはち

あぐる退	あぐる逃	あぐる抜	あぐる捨
あぐる溜	あぐる開	あぐる遣問	あぐる被壓
あぐる毫	あぐる散亂 又壞	あぐる負	あぐる曲
あぐる平	あぐる焼	あぐる和	あぐる分
あぐる破綻	あぐる同上		

○あぐる古事記中巻に逃散ニテアラサ日本紀神代巻に散去アラサ又
廿六上散卒アラサなり
○いぐる源氏繪合ハハいけるはつるい榮たわらりや
やく藤壺いけるたつるいやわらりや

あゆむを動搖	あつを致	うのを又寫	うるほを潤	たつを後	たつを欲	たつを及	たつを挿頭	たつを通
あつを頭	つぎを出	うらつを遷	たつを押	たつを興	たつを情	たつを下	たつを下	たつを下
へつを活	つゆを坐	うなつを促	たつを犯	たつを落	たつを劫	たつを思欲	たつを交	たつを乾
ふつを急	うぶつを動	うつを慰	たつを後	たつを威	たつを生	たつを隠	たつを返	たつを聞

さあを食	さあを腐	くやを崩	くやを狂	くやを越	くやを覆	くやを殺	くやを喻	くやを示	くやを過
さあを前	くだを下	くやを薫	くやを黒	くやを焦	くやを今嘉	くやを指	くやを覺	くやを記	くやを之
さあを消	くやを崩	くやを暮	くやを燦	くやを志	くやを又展轉	くやを搜	くやを晒	くやを知食	くやを澄
くやを覆	くやを廻	くやを穢	くやを細碎	くやを又疑	くやを流落	くやを縮凝	くやを賺	くやを濟	

鍛作が... 義... 九... 加... 師... 鍛... 異

○ 杉びやも字鏡一憎又憐於比也須とらるるれのもにて外お
 なしそハ加の字れ既オキたふハ行けり

○ 杉びやも 係氏系をいおびや... 名をばとあや

○ 杉やも 万葉十八ふすれ於保之同二十ふあをけり於保佐牟
 まとまみ於保世流古伝ニ又云とらるる杉... 行不あう

またづの村をきよとてあす松のくやしにらるるあやれま
 しはてうく杉サせりなごんて東四の音よりるでせのてお

きとけうらるハ四段の信細のあが後う信の三種のそとさきと
 そよハこの例なり

○ 杉やす うらほ物信後藤をふたよほまむとあや

○ かたも 日本紀神代卷に鍛カガ作新鈎云々三代實録十八
 改鏡益神室為貞觀永室常乃鑄錢司路遠妨多尔依天
 加太之於山城国葛野郡一天令鑄作云々とらるるなり

○ かよるい 後撰集よせり... 通 ゆるらるに云と
 又うらるにそかよるうら... 通 人...
 金葉集列いふみか... 通 佐より物つたてう
 文通 淵ノマコキテ

このよは呼ほふおど第三乃きより下へけけりつるハ四段の
 信河の例も又トむのてよをう成才一乃音よまうく於ハ四段
 の信と成たうことあさりてきまらうさるあのおく

かきけりて透
かきけりて透
かきけりて透
かきけりて透

色ふたが
色ふたが
色ふたが
色ふたが

美良佐比
美良佐比
美良佐比
美良佐比

かきけりて透
かきけりて透
かきけりて透
かきけりて透

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

ツブサズレテハ
ツブサズレテハ
ツブサズレテハ
ツブサズレテハ

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

○たぐも 源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に
源氏物語に

古今集云古今集此哥六帖四小藤生野の國相樂君

こふあがなるハハのトニ思ふを活てまぎしきゆえ
 かりけいこや下二思のこふふくくつど
 ○あほろそ万葉一子仁寶播散麻思乎あざれサほーこれ
ニホハサウモラ
 ちつろそにねたト下につど
 ○こつと古今集ふあへもつ心とぞててつど
ナリトモステモノニスマイ
 ○こつと源氏あきにてつど
ヤリツバナシニシタ
 ○こつと催馬樂小藤野のつど
形原生又榮
 あつ林もこれつど
 ○こつと古事記上巻小蹶散ヤあふこれあり
五シカ
 ○こつと出雲國造神賀詞小意志波苗志天云く
オシ

とも野と程の事

ひこ積る日意をひと

○こつと祈年祭祀詞小見ハカカマシ坐へせつど
ハラシ井マモ
 千載集哀傷よひのこつと
 ねつと
 ○こつと古事記上巻に治養とひつど
日足奉
 ○こつと紫式部とねつと
サヘモハラサズシテ
 又源氏物語よひつと
 ○ひつと他や相唐祭の使乃坐ふ馬とつど
池
 冷やー云々晴蛉日死小馬も浦小引サつとつど
 云々木某安法つとつど
 まつとあり

本言の
続用言
ナ行變格
のなを
けの本言
の未然と
の辭格
をけ
る

らやわいとまゝ落窪ふ男りる也トセ源氏第本に
こあをむの心まねど又夕靨巻にも種なをりやせむ
あをむバ云順集上凡がむたなく明らふあをむ信明
集にまなくばり逢ゆる人そあをむも志まうなごれいせ
むやしめ河あをむむあをむべあをむしご四夜も信
くまなくむあをむむあをむむあをむむあをむむあをむ
右のむむむむむの源氏のむむむむむむむむむむむむむ
よむれば四夜の信くあをむのむむむむむむむむむむむむ
○いまむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
ほむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
○いまむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
ほむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

海舟お右左将の守治へいむむむむむむむむむむむむむむむむむ
おまむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
のなまむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
陰ふらむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
さそいこむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
くあをむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
こむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
○かこむむむ 万葉十八お於許世年うむむむ十九お於己勢
多流古今集におこむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ
サレコレテアツク

みづの約
あつての時
とて

とてこれのまゝの田候へ活きたるまゝをひらけりな

○まわらむ源氏桐壺よつとをいふ。せとやどおむや

○むむる和名抄不喫咽無須源氏あやのまにむさひ

むせとるまゝなど見えたり

○古くもせあるまゝをあるを内うせのほまをたるわく

これ活相よりいふごとのよう加^カの下の二候の末よつとむさひ

しとて萬葉十五よひとくに君を^{伊麻勢}とあるを因^{マサセテ}

他 國 往

